カナダの現代絵画

ウイリアム・ウイズロウ

この四半世紀は、カナダの絵画および画家にとって激変の時代であった。

まず、ここではじめて、カナダの絵画が二十世紀に追いついた。ヨーロッパでは、第一次世界大戦当時、すでに抽象絵画がしっかりと確立されていたが、カナダの絵画がこうした世界的な潮流に合体したのは、ようやく一九四〇年代（モントリオールの場合）から一九五〇年代初期（トロント）にかけてであった。そして戦後二十年をまたずに、非具象派がカナダの画壇を牛耳るようになり、国際的な非具象派画家も何人か輩出した。ジャン・ポール・リオペルはパリの寵児となり、ウイリアム・ロナルドは全作品をニューヨークで売っていた。（ロナルドは、一九五六年に国際的な競争をへて、グゲンハイム賞を獲得した。一九五八年にはバンクーバーのジャック・シャドボウルトが、一九六〇年にはポール・エミール・ボルジュアスが同賞を受賞した。）一九七一年には、ジャック・ブッシュが、アメリカの批評家から、「現代における勝れた非具象派画家の一人」と折り紙をつけられた。

時期を同じくして、一様に新規のアイデアや、ふくらむ野心に駆られた画家の姿が、カナダで目立つようになる。カナダの画家が数をました影響が、少しづつ、しかし確実に感じられた。カナダの現存美術家の作品が、美術館や毎年の社交界ショーに展示されるばかりでなく、予想外と思われる場所に公開されるにおよび、つくづく美術活動が盛んになったとの感を深めた。さらに、作品自体がしばしば健全な批評の対象となり、美術が人々の話題になった。

そして美術家もテレビに出たり、ラジオで話したり、新聞や一般雑誌に紹介されたりするようになったが、これは同じ四半世紀に起こったもう一つの変化につながる。すなわち、画家の地位向上である。したがって、一九四五年から一九七〇年の期間を論じることは、カナダの絵画が成年期に達し、カナダ社会の極めて重要かつ意義深い要素として認められ始めた経緯を論じることにほかならない。

終戦が転機

それはまた一つの時代の終焉を論じることにもなる。最近まで絵画がカナダの視覚芸術を完全に支配していた。しかし現在は、主だった画家のほとんどすべてが、詩、映画、写真、さらに音や多媒材を使った創作など、他の表現形式や表現方法を実験中だ。

変化は第二次大戦の終末とともにやってきた。これには二つの理由があった。第一の理由は、一九四五年にエミリー・カーが没したことである。自己を表現するため、またカナダで画家としての生命を保つため孤軍奮闘する彼女の姿は、今世紀前半のわが国の状態を象徴するかのようであった。画家に対する偏見は根強かった。アート・スクール自体、頑固で保守的であった。技術万能主義で、新らしい試み、とくに「モダニズム」運動は頭ごなしにおさえられた。芸術団体や協会も五十歩百歩であった。どんなに確かな能力をもった画家でも、「美術」だけで生活することは殆んど不可能だった。カナダの画家の作品を買うのは、彼の死後、評価が確立するまで待つということであったらしい。「モダニズム」画家にいたっては、作品を展示する場所も得られず、まして、個展の開催や、作品を託する画商など望むべくもなかった。しかし、まことに遅ればせながら、エミリー・カーは世を去る直前、国立美術館館長から認められた。これにもまた象徴的な意味がある。終戦と共に、国内で何事かが起きつつあったのだ。

アーツ・アンド・レターズ（文芸）クラブ（トロント）所属の一グループが、カナダ文化に対する政府の援助をとりつけようとして、積極的に動き出したのも一九四五年であった。初期のこの小さな努力の芽生えが大きな枝葉をひろげるまでに成長して、やがてカナダの芸術界の様相を一変することになる。第一歩はカナディアン・アーツ・カウンシル（一九五九年にカナディアン・コンファランス・オブ・ザ・アーツとなった）の創設である。このカウンシルの尽力で、カナダ政府は、芸術、文学、科学の分野の発展を調査するための政府委員会の設置に同意した。一九五一年には同委員会の報告書が発表され、その直接の結果として、一九五七年にカナダ・カウンシル（カナダ文化振興会）設立の運びとなった。

こうした画期的な成果が現われるはるか以前から、さまざまなことが起こってはいた。

芸術運動の勃興

最初の舞台はモントリオールであった。パリから帰ったアルフレッド・ペランは、帰国後第一回の展覧会を開くか開かないうちに、もう学生達の人気を集め、新技法の実験にかかっていた。一方、モントリオールの画家兼教師、ポール・エミール・ボルジュアスは、オートマティックなアクション・ペインティングを用いて、アブストラクトの作品に挑み始めていた。まもなく、レ・ゾトマティストというグループが彼のまわりに結成された。他の若い、急進派の同志たちと共に、一九四八年に「レフュー・グローバル」と題する反抗的戯曲、詩集を出したのは、このグループであった。これは美学理論ではなく、政治的、社会的抗議のドキュメントであった。ボルジュアスは当時の組織化された宗教とケベック政府による抑圧を厳しく批判した。「レフュー・グローバル」の発行は大反響をまき起こした。そして、このエピソードはケベックの新進画家たちにとって、なぜか不思議な解放力として作用した。

一九五四年、レ・ゾトマティストが衰退すると、いち早く、共同の展覧会を開いていた若い四人のモントリオール画家（レ・プラスティシェン＝造形派）が彼らにとって代わった。主としてピート・モンドリアンからインスピレーションを受けていたレ・プラスティシェンは、形状的要素の強調による芸術の純化を目的